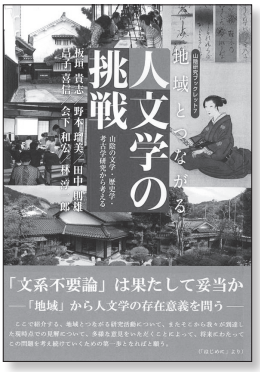

本学教員が関わった本

山陰研究ブックレット7 地域とつながる人文学の挑戦：山陰の文学・歴史学・考古学研究から考える

板垣 貴志［ほか］著
今井出版、2018年３月

紹介者　田　中　則　雄
（法文学部山陰研究センター長）

島根大学法文学部では、「山陰研究センター」を拠点に、地域再生・エネルギー問題・歴史・文学など、地域課題の研究を続けている。

さて、2015年６月、下村博文・文部科学大臣（当時）は、各国立大学長に向けて通知を出し、教員養成系と、人文社会系の学部・大学院について、「18歳人口の減少や人材需要」等を踏まえて、「組織の廃止や社会的要請の高い分野への転換に積極的に取り組む」ことを求めた。この通知は「文系不要論」と受け取られ、早速、国立大学法人十七大学人文系学部長会議（島根大学法文学部も所属）、日本学術会議の幹事会、さらには経団連などからも、反論や批判的意見が表明された。

当の文系学部側も、しっかりとした根拠を示しながら自分たちの存在意義を言明していくことが求められることとなった。かくして山陰研究センターでは、2017年７月、人文社会系学部の存在意義を「地域」との関わりという観点から考えるシンポジウムを開催し、その内容を元に本書を刊行した。

第１章（板垣貴志／法文学部）では、鳥取県伯耆町・矢田貝家での、研究者と地元住民が一緒に古文書を解読する「住民参加型」調査を取り上げる。住民には、研究者の知らない地元の地名・人名・慣習などのことがわかるので、その知識と、研究者の知見とを合わせながら解読していくと、今から約90年前の人の動き、物の動きが鮮明に再現されてくる。

第２章（野本瑠美／法文学部）は、島根県の出雲大社近くに江戸時代前期から続く手錢家の資料に関する取り組みを紹介する。山陰研究センターの研究プロジェクトにより、江

戸時代・大社の人々が、和歌・俳諧を熱心に学習し、創作を行い、そのために人的ネットワークを形成していたことが解明された。いま地元大社町で実施している古典講座では、手錢家資料を題材に、そうした江戸時代の文芸活動を住民とともに追体験している。

第３章（田中則雄）では、鳥取県琴浦町の河本家(江戸時代の大庄屋)について、地元保存会の人々が、同家の住宅（江戸時代前期建築、国指定重要文化財）をはじめとする文化遺産を守りながら積極的に公開を進めていること、島根大学の研究チームが、この活動と協働しつつ、同家に伝わる古典籍（江戸時代から明治初期にかけての和装の書物）約4800冊の調査研究を続けていることを記す。

コラム（昌子喜信／附属図書館）では、河本家の古典籍を、島根大学附属図書館のホームページを通じデジタル画像によって公開する取り組みについて紹介する。

第４章（会下和宏／総合博物館）は、島根県の江の川流域が、先史時代以来の遺跡、文化財の宝庫であることを示したうえで、この一帯を一つのミュージアムと捉えて、研究者と市民が一緒に実地をめぐる活動を行ってきたことを述べる。

第５章では、中国新聞社の林淳一郎記者が、2016年の連載記事「人文学の挑戦」について紹介。この連載記事は、中国地方の大学を中心に、文学・哲学・歴史学等の研究者や、出版など人文学と関係の深い業に携わる人々に密着取材し、人文学による真理の探究、その発信活動の様を鮮明に描き出すものであった。

本書はこのように、地域に入り込み、地元住民と一緒に行ってきた研究活動について具体的に紹介した上で、以下のことを示そうとする。

――人文科学、社会科学の大きな役割として、過去から現在に至る人間の営みの跡を掘り起こし、それを記録し、意味づけるということがある。とすれば、地域は、その生データが豊富に存在するフィールドであり、研究者はここに積極的に踏み込んでいくべきであろう。ローカルな素材を追究して普遍に到達する可能性は大いにある。

人文社会科学は、人間の多様な営みを研究対象とする。空間的に大きく拡がり、時間的に何層にも重なる、その中から立ち上がって見えてくるものこそ、人間がこれからどう生きるかを考える際の礎となり得る。この観点からも、地域とつながる研究

は大きな意味をもつはずである。

この１冊に紹介した地域とつながる研究活動や、またそこから私たちが到達した現時点での見解について、多様なご意見をいただくことによって、今後もこの問題について考え続けていくための第一歩となることを願う。